PROJECT

AMUR

1998

Edited by Hirofumi KATO,
Masahisa YAMADA and I.Ya. SHEVKOMUD

Masters Program in Area Studies
University of Tsukuba

Project "AMUR" Research Group

チリャー第３遺跡出土の線刻による騎馬像を有する土製品について

V.A. デリューギン[1]

S.F.　コシーツェナ[2]

1998年のハバロフスク州立考古学博物館の展示換えの際に、収蔵資料の中にこれまで目録に載っていなかった板状を呈する土製品（第１図）が発見された。出土経緯について調べた結果、本資料は1991年にローサン女史がアムール河口部に位置するチリャー湖沿岸のチリャー第３遺跡にて採集されたものであることが明らかとなった。

断片であるため、板状を呈する土製品の用途については不明であるが、胎土はこの遺跡によく見られる江の浦Ａ式のものに類似する。この土製品の裏側には、高温で焼成されたことにより、含まれていた砂の一部がガラス状になっている痕跡がみられる。チリャー第３遺跡では鉄滓や羽口片が発見されていることから、鉄の鋳型で焼かれたことがわかる。この土製品はおそらく鉄を溶かす時に同時に焼かれたもので、この図像を書き入れた人物もこの溶解に関与していた可能性がある。

線刻は直線で書き入れられており、内側と外側がかすれているが、焼成前にナイフもしくは別の鉄器で書き入れられたものと推察される。断片であるため、全体の構図は不明であるが、馬の足や背の部分、前方に向けた槍の部分が残っていることから、図像はおそらく乗馬兵と思われる。上部に観察される刻み目は南貝塚式や江の浦Ａ式土器に特徴的な模様である。

描かれている馬の三角形の頭や箒状の尻尾などの特徴は、シカチ・アリャンの岩壁画の乗馬兵の図像の描き方とは似ていないが、マイ旧村の岩壁画(第４図)と最も類似する。オクラードニコフ氏は、アムール下流域地方にまで金の勢力が及んでいたことから、このような図像を残した集団が成熟した文化を持っていた女真であるはずがなく、靺鞨時代に属するものとみなした(オクラドニコフ　1971)。

線刻の施された土製品はロシア極東南部ではかなり珍しい。そのような線刻の施された図像の類例の大半は報告されているが、図像としては馬を描いたもの（グーセワ　1983、1989、トウピーキナ　1989）や生活の情景が描かれているもの(オクラドニコフ　1971)などがある。その中でもパクローフカ１遺跡出土の土器片に描かれていた図像(第２図)に類似性を認めることができるが、パクローフカ１遺跡の例はロールスタンプ技法で描かれたものであり、土器の文様帯の中に組み込まれている点で異なっている（クラーミンツェフ・ラースキン・キセーリョフ　1996)。

12世紀終末～13世紀初頭のシャイガ土城出土の土器の図像について研究したトゥピーキナ女史は、チュルク族・モンゴル族の遊牧民と極東の特定の集団との間につながりがあったと考えた。

---

[1] 筑波大学大学院歴史・人類学研究科研究生

[2] ハバロフスク州立郷土誌博物館

しかしながら、アムール流域に分布する中世の岩壁画が靺鞨時代に属することについての確証は殆どない。

岩壁画を除くと、沿海州と沿アムールにおいて最も広くみられる乗馬兵像は、パクローフカ文化、アムール女真、同様に金代に位置づけられる青銅製の垂飾品として存在する(メドヴェーデェフ　1986)。

シカチ・アリャンの中世に位置づけられている岩壁画の年代もまだ明らかになっていない。

シカチ・アリャンとは異なって、マイ旧村の岩壁画にはタイガ地帯の集団の芸術の要素が窺える。トナカイに乗っている人物像はこの時期にもトナカイ飼育があったことを示している。アナーニェフ土城出土の土器には鹿またはトナカイに類似した動物の簡略化された図像が描かれている(グーセワ　1987, pp124-125)。しかしながら、この動物が家畜であったと解釈するのは困難である。

オクラードニコフはマイ旧村の岩壁画とシカチ・アリャンの岩壁画との間に類似点があるにもかかわらず、前者の岩壁画はタイガ地帯の遊動集団のハンターの世界に関係があると指摘していた。マイ旧村の岩壁画を残しトナカイ飼育集団は「アンガラ河下流域の周辺から来ており、アムール河に8世紀～10世紀の後半頃に進入してきた」と結論づけた(オクラードニコフ　1971)。

この年代はテバフ式・江の浦式・南貝塚式土器の編年に関する最近の理解(デリューギン　1998)と一致している。従って、テバフ式土器は8世紀頃にアムール河に進入してきたタイガ地帯の集団に関連するものと考える。

以上のことから、チリャー湖乗馬兵像が線刻で施された土製品は、マイ旧村の岩壁画の年代を示唆するものであり、いわゆる「テバフ文化」の土器の編年・分類についての仮説の確実性を指示するものと考えたい。

参考文献

オクラードニコフ A.P.　1971　『アムール河下流域の岩壁画』レニングラード

グーセワ L.N.　1983　「沿海州女真の土器の生活の情景が描かれている絵について」『古代文化の彫塑術と絵図』ノヴォシビルスク、pp.122-130

グーセワ L.N. 1987「アナーネフ土城における土器模様の特性」『ソ連極東考古学の課題』ウラジヴォストク, pp.120-27

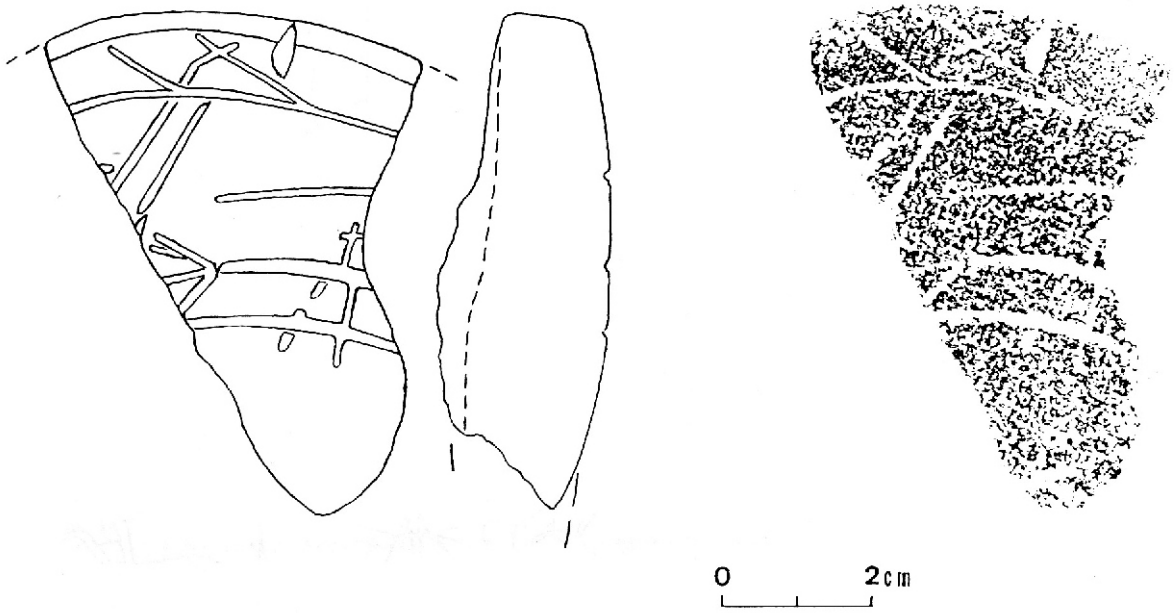
グーセワ L.N. 1989「沿海州女真の芸術の馬肖像」『ソ連極東中世紀考古学の新発見』ウラジヴォストク, pp.120-126

クラーミンツェフ V.A.,ラースキン A.R.,キセリョーフ S.N.　1996　「パクローフカ第1遺跡の保護発掘」『シベリアの考古学・民族学の新発見』ロシア科学アカデミー・シベリア支部考古学・民族学研究所, ノヴォシビルスク,pp.129-132

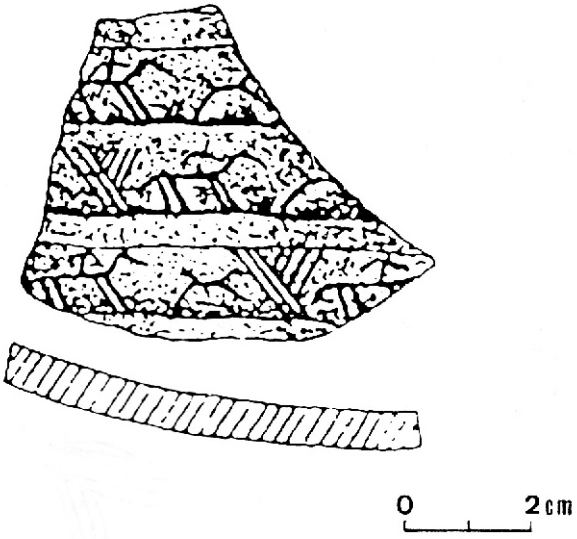
デリューギン V.A.　1998　「[テバフ式]土器」『ロシアとアジア太平洋地域』No 2、ウラジヴォストク、pp.71-80

トゥピーキナ S.M.　1989　「沿海州の古代の民族・文化の関係について」『ソ連極東中世研究の新発見』ウラジヴォストク、pp.30-33

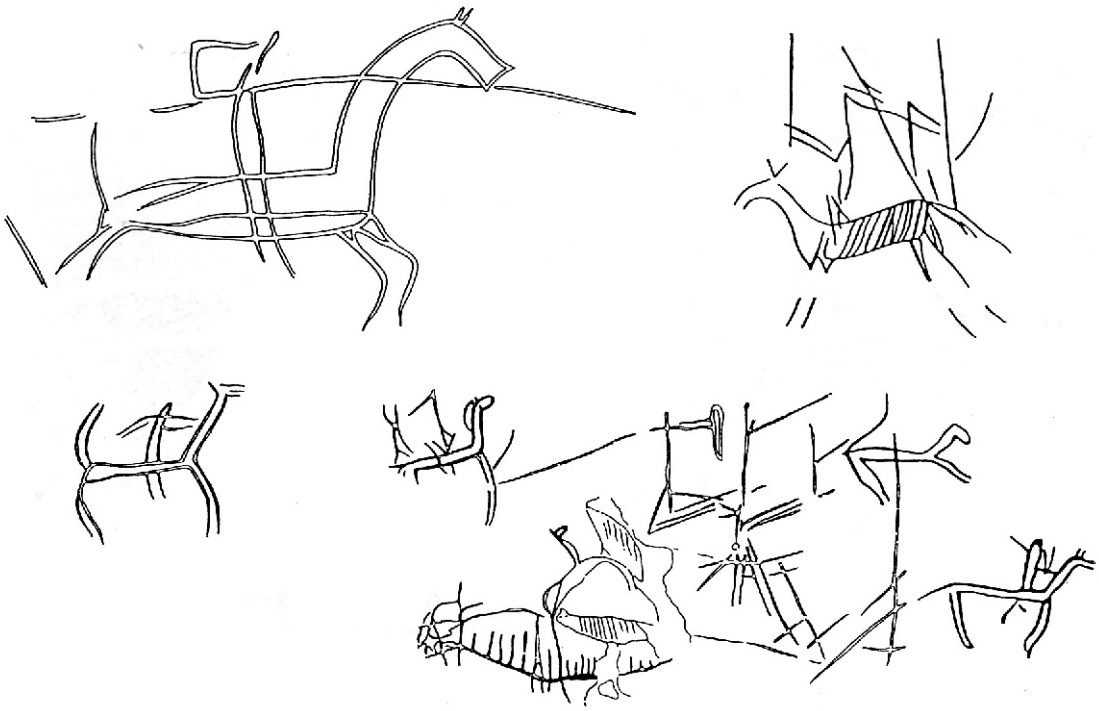
メドヴェーデェフ V.E.　1986　『西暦紀元1千年終末―2千年初頭のプリアムーリエ地方―女真時代―』ノヴォシビルスク



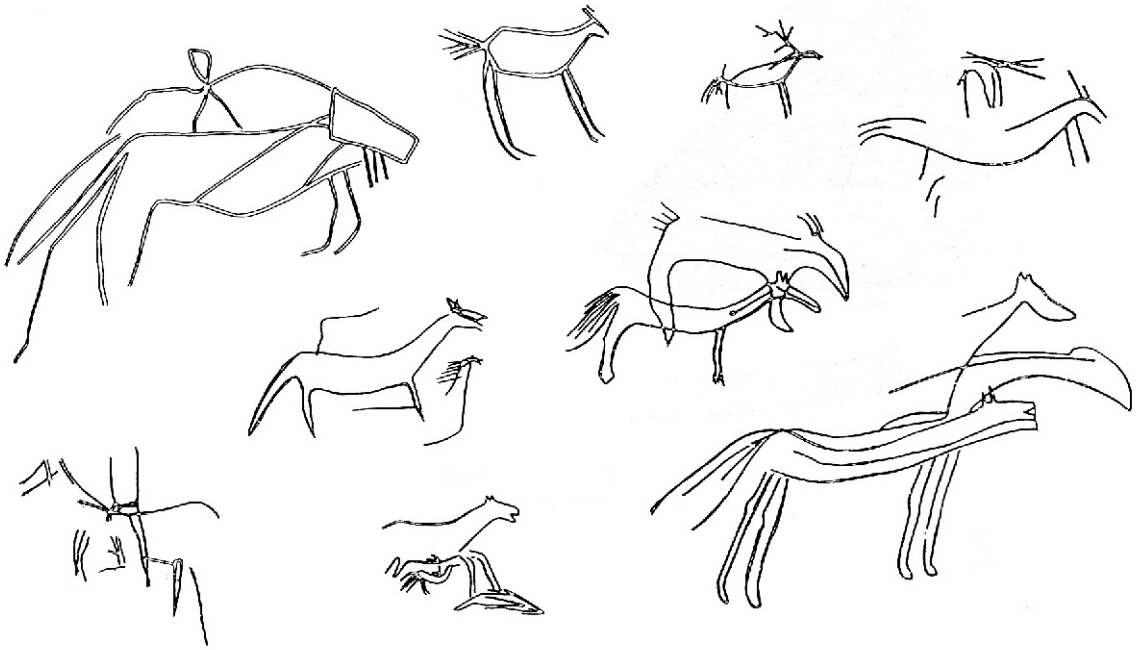
1



2



3



4